

四旬節第2主日

福音朗読 マタイ 17・1-9

2023.3.5

カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

今日の福音では、山の上でイエス様の姿が変わる、いわゆる主の変容の場面が朗読されました。毎年四旬節第2主日には、福音書は変わっても、場面としてはこの主のご変容のところが読まれる、ということになっています。

山の上でイエス様の姿が変わる、光り輝く。そういう姿を見せられたわけですね。それは、イエス様は、普段はみすぼらしい姿ですけども、ほんとはすごいんだよ、ということを示したかったためではないわけです。むしろ、本当に変えられるべきは弟子たちのほうなんです。イエス様は、ご自分と歩むものが行き着く先は何か、また、どのような者にするために招かれたか、ということを示すために、このご変容、ご自分の姿が光り輝く、その場面に立ち合わせたと言って良いのではないかなあとと思います。

神のみことばそのものでいらっしゃるイエス様はご自身の中から輝いていらっしゃる姿なんですけども、イエスと共に歩む者も、イエスご自身すなわち神のみことばがその人の中にあって内側から輝く、そうして世の暗闇を照らす、そのような者となるんだということです。それが神様が造られた本来の人間の姿なんだと聖書は言うわけですけども、そのような者へと変えていくために、イエス様は弟子たちを呼ばれた、ということです。

主は弟子たちを呼ばれただけではなくて、聖書のみことばを通して、今日わたしたちもその場面に立ち会っているのです。わたしたちについてもそのことは言える。わたしたちが信仰の恵みを頂いているのは、みことばに出会い、イエス様に出会い、そのイエス様の影響を自分の中にイエス様をお迎えする程に受けて、その輝きによって自分自身も照らされて、そして世も照らす者になるためであるということです。聖書を通して、またミサの中でご聖体を通して、わたしたちはイエス様ご自身を自分の中にお迎えする。ミサの中でその希望を表わしているわけです。イエス様の輝きはわたしたちを通して輝いて世を照らす。世と言うと大袈裟なんですけども、自分の周りを照らしているだろうか、希望を与えあい、進むべき道を一人ひとりが見出すような助け合いのともしびとなっているだろうかということを考えてみる必要があるわけです。

聖体ランプ、このお御堂の聖体ランプを見てください。聖体ランプは「ご聖体がここにありますよ。イエス様がここにいらっしゃいます」ということを示すために光っているわけなんですけども、文句を言うわけじゃないんですけど、文句ですけど(笑)、

このお御堂の聖体ランプはちょっと見にくいですね。点いてるんだか点いてないんだか分からないですね。なんでですか？それは周りの装飾が大きくて光が小さいからです。でもここのお御堂だけではないんです。わたしが前に居たところもおんなじです。聖体ランプは装飾が凝っていて、中の光を示すっていうよりは飾り優先みたいなので光が見えにくくなっているのは現代の一つの流行かもしれないんですけども、「ご聖体がここにある」っていうことを示すっていう目的が二の次になってしまっているような、でも別に買い替える必要はないですよ（笑）、これは教会の道具だから、聖体ランプは聖体ランプで、それでいいです。

けれども、イエス様をわたしたちの中に迎えるように呼ばれたわたしたちは、そうであってはならないでしょう。自分が周りの人にどう見えているのか、自分の美しさを示さないと、自分のかっこいい姿を示さないと、あるいは、自分の有能さを示さないと、っていうことばかりに気を取られていると、本来の一人ひとりの中にいらっしゃって輝こうとされているみことば、イエス様の光を照らせないし、そうだと自分自身も暗いままだし、周りも暗いままだという状態になってしまうわけです。

それは、実はペトロとか他の弟子たちもおんなじでした。自分の力でずうっとイエス様について行けるって思っていました。けれども、イエスが十字架に架かる段になったら、全ての弟子が逃げ去ってしまった。でも、そうやって自分の弱さに直面させられることを通して初めて、みことばを自分の力によってではなくて恵みによって受け取り、そして世において輝かす者に変えられていきましたということを聖書は語っている。自分の弱さに直面せざるを得ないっていう体験を通して、ですね。それが神様が最初に弟子たちを導き、わたしたちを導かれる変容の道とっていいわけです。

弱さを受け入れる、それは、「自分は弱い者だから仕方がないんです、このままで」っていうように開き直ればよいという意味ではないわけです。むしろ、弱さを直視し、それをありのままに受け取りながら、でもイエス様と共に担っていく、そういう招きです。そのときに、みことばは一人ひとりを照らし、また一人ひとりを通して周りを、世を照らすようになる、ということです。

教皇様は毎年四旬節のためにメッセージを出されているんですけども、今年の四旬節の教皇様のメッセージは、今日のこのご変容の場面を取り上げていらっしゃいます。[カトリック中央協議会のホームページから見るができます](#)ので、是非全文お読みになったら良いのではないかと思います。その中で、教皇様はわたしたちが変えられていく、変容へと至るための二つの道しるべについて語っていらっしゃいます。

ひとつは、「これはわたしの愛する子。これに聞け」っていう父の声が聞こえたっていう、今日の福音で言われているように「これに聞け」（「これ」ってイエス様のこと

ですね) っていう父である神様の声に従って、イエス様に聞く。それは第一には聖書のみことばを通して。毎日毎日朗読の配分個所があるわけなので、ミサに出られなかったとしてもいろんな形で——「毎日のミサ」とかインターネットとか、そうじゃなくても自分で少しずつでも——聖書に触れて、イエス様のお姿に触れていく、聖書を通してイエス様に付き従う。と同時に、聖書だけじゃなくて、他の人、兄弟姉妹の中に、特に助けを必要としている人々の顔、その生活の中から語り掛けられる主の声に聞こうとすること、それがわたしたちが変えられていく歩みの一つ目の道しるべです。

もう一つが、「起きなさい。恐れることはない」。弟子たちが恐れて顔を伏せていると、イエス様が触れて「起きなさい。恐れることはない」っておっしゃいました。そのイエス様のことばに従うことです。それは具体的にはどういうことかと言うのを教皇様が語っておられますので、直接引用します。

「それは、現実と、そこにある日々の労苦、厳しさ、矛盾と向き合うことを恐れて、日常と懸け離れた催しや、うっとりするような体験から成る宗教心に逃げ込んではない、ということです。」

と教皇様はおっしゃいます。信仰を通して現実に立ち向かっていく力を頂くように招かれている。しかし、そうではなくて現実逃避の、目を逸らしていく、そういう口実あるいは材料として信仰を使う、そういうことを戒めていらっしゃるわけです。

神様の聖書のみことばと、困難にある兄弟姉妹の中で語られるイエス様のことばに耳を傾ける、そして信仰を現実逃避の道具にしない。この二つのことを心に留めつつ、教皇様のお勧めに従って四旬節を過ごすことができますように。そして本当にこのごミサの中でわたしたちが典礼を通して表現する一人ひとりの中にイエス様をお迎えするっていうことがわたしたちの中に実現する、わたしたちが変えられて、そしてイエス様の光が輝くように。そのお恵みを互いのために願いながら、この四旬節第2主日のごミサをお捧げしたいと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>